

プロローグ

そう、私は、ごくごく普通のOL。

いや……普通という言葉すら、きつとわたしには贅沢すぎる。

真っ黒な髪、控えめな銀縁メガネ。毎日、無難を絵に描いたような服を着て、会社と自宅を往復する。特別な才能も、人を惹きつける華やかな見た目もない。誰かの記憶に残る個性なんて、ほんのカケラも持っていない。

恋愛？

ああ、それも空っぽ。誰かを熱烈に好きになったことも、恋されたこともない。休日は大抵ひとり。友達とカフェでおしゃべりする事も無く、家から出ない。家で静かに、本や映画の世界に没頭する時間のほうが、圧倒的に好きだった。

「……明日、仕事行きたくないなあ」

誰もいない一人部屋で、ポツリとつぶやく。

わたしの人生は、ただ流れるままの、平凡な毎日の繰り返しだ。そう思うと、胸の奥がヒリヒリと痛む。自分の存在感の薄さを毎日、痛いほど感じていた。上司の雑な指示に振り回され、先輩には、まあ普通の子としか見られていない。

何か意見を言おうとすれば、変に思われるのではと、ビクビク怯えてしまい、結局、黙ってハイと従うばかり。イエスマンの中のイエスマンだと自覚してる。楽しそうに笑う周りの同僚と自分を比べるたび、劣等感が胸に重くのしかかる。わたしに特別な価値なんてない。自己評価はいつも底辺だった。

「もつとがんばらなくちゃ……ね」

心の奥では、誰かに必要とされたいという小さな願望がある。そんな思いが、炎のようにくすぶっているのを知っている。だけどそれを表に出す勇気なんて、あるわけがない。なにも起こらないまま、平凡な一日が過ぎていくのだった。

そんな地味過ぎるOLの私が、あんなことになるなんて……。

翌朝。

ピ°ピ°ピッ、ピ°ピ°ピッ！

「ふぁーあ……」

目覚ましの電子音を止め、わたしは重たいまぶたをこすりながら起き上がる。
カーテンの隙間から差し込む朝の光は、薄く反射して部屋を淡く照らしていた。

パタン。

冷蔵庫から取り出したヨーグルトをかき混ぜながら、小さく「ふう……」と

ため息をつく。今日も朝から終電間際まで、ひたすらパソコンの前に座って、数字や書類とにらめっこするんだろう。本当は、定時で早く帰りたいのに。

そして……やっぱりその通りの時間を過ごした。もう、時計の針は午後三時。

休憩時間に席でコーヒーをすすする間、同僚をみる。

いいなあ……楽しそうで。

明るい彼女は、いつも人に囲まれている。でも、わたしはそこには入れない。わたしの居場所は、いつも空席。孤独を感じ、自分を小さく評価する日々。

いつもどおりの不毛な一日を終えて、遅めの時間の帰宅……その途中。

いつも通る駅の階段で、突然、妙な眩暈を感じた。

「あれ……？」

足を止め、立ち止まる。頭がフワリと揺れるような、宙に浮いたような感覚。周囲には、人の姿も音も、いつも通りにザワザワしている。空気の密度だけが、グッと変わったように感じた。耳鳴りかと思いつつも、周りを見渡す。

「なん……でもないよね」

駅の改札を抜け、人気のない路地へ入る。ヒヤリと冷たい風が肌を刺す。

でも、風だけじゃない。何かに見られている、という確証のもてない感覚が、背中にドシンと重くのしかかる。その視線を探しても、そこには誰もいない。

いないよね……。

足元の影や、街灯のユラユラとした揺れが、なぜかイヤに目に入ってくる。体の奥で、理屈では説明できない謎の緊張感が走った。この世界の空気自体が、わたしをジッと見つめているかのように感じる。次第に、恐怖を感じて来た。

「やっぱり……何かに……見られてる？」

歩を進めるたび、チカチカと赤い光や、影のモヤモヤとした揺らぎを感じる。耳元にサアアと囁くような風の音、カラスの鳴き声、心がザワザワと騒ぎ出す。冷たい空気が皮膚をぞくりと這い上がり、全身にぶわっと鳥肌が立った。

「……誰か、いる？」

思わず、小さな声を出す、答えはない。それでも、わたしの息の荒さと、胸の鼓動の速さは止まらない。理性では気のせいだとブンブン首を振るけれど、わたしの体は確実に、何か異質なものに反応している。

「……いや」

怖くなつて足早に走り出す。日常が少しずつネジ曲がり、平凡だった世界が、今ほんのわずかに異形を帯び始めてる。細い糸が、一本また一本と切れていく。

まづいまずい！　なんか変！

そんな心理的な焦りを感じながら、私は、ただ前に足を運ぶしかなかった。歩を進めるたびに、視界の端で揺れる赤い光が、目を刺すようになっていく。

「……まさか、幻覚……？　きゅ、救急車呼ばなきゃ……」

慌ててスマホをとるけど、胸の鼓動はもう止まらない。空気が重く張り付き、足元の影がねじれるように動く。そして……突然、視界が真っ白に染まった。

シャン！

「えっ……」

あたり一面が、光の渦のようぐると回る。目を開けていても閉じていても、現実の感覚がすべて溶けていくように、時間ごと自分が溶けていくみたいないな。

「な、なにこれ！！……」

声が出る。叫びたくても、口は固く閉ざされ、声は風に遠く吸い込まれる。重力の感覚がおかしくなり、宙に浮かんでいるのか落ちているのかわからない。

し、死！

すると……背後から、低く、鋭い囁きが聞こえたような気がする。

「……君が、必要だ」

光が一気に吸い込むように膨らみ、身体の芯まで引き裂かれるような感覚。思考も、記憶も、現実も、私の命のすべてがかき混ぜられる。

えっ？ 私……死ぬ？

息をすることすら重く、胸が締め付けられる！

ブーン……。

次の瞬間、白い光の中で空間が割れるように変化した。目の前に広がるのは、深紅の空と、尖塔が林立して不気味に聳え立つ城。地面は真っ黒く光る石畳で、どこまでも広がる光景は、異世界そのものの迫力を帯びていた。

「……ここは……？」

言葉にならない。体はまだふわふわとして、まるで夢の中にいるようだった。でも周囲の空気は確かに重く、どこからともなく血の匂いが、かすかに漂う。急激に、巨大な気配がゆっくりと近づいてくる感覚。背筋が凍るような圧迫感。

「……誰……？」

その声が震える前に、全身を覆う重力のような力で私は無理やり立たされる。

「ひっ！」

だがその次の瞬間、不意にガクツと膝をついた。

「うあっ！」

ひやりと冷たい感触がスカートの布越しに、ジンジンと伝わってくる。

重くて、湿った空気。鼻を刺すのは、甘ったるい鉄の匂いか、血の匂いか。まるで、空気そのものが、ドロリと血に染まっているかのようなようだった。

ハッと顔を上げる。

なぜかそこは、巨大な円形の空間だった。今の今まで、外にいたはずなのに。あり得ないほどの荘厳さと、ゾツとするような冷たさを併せ持った場所だった。床には複雑な紋様が赤黒く刻まれていて、わたしはその中心に座り込んでいる。円環の模様は淡くボウツと光を放ち、今もなお熱を帯びていた。

これ……祭壇？

直感で、そう理解した。

訳が分からなかった。会社の帰り道に聳え立つ不気味な城、そしてこの祭壇。周囲を取り囲むように並んだ燭台には、青白い炎がユラユラと揺らめいている。光の届かない壁に、巨大なステンドグラス。彩られているのは聖人じゃない。牙を剥いた獣や、血塗られた翼を広げる異形。ぞっとするほど、異質な光景だ。

そのとき。

背後で衣擦れの音がした。反射的に振り返る。そこには人ならざる気配が、ゆっくりとヌツと立っていた。人の気配なんか、なかったように感じたけど。

大きい。

黒い外套が床まで流れ落ちるように広がり、周囲の闇を吸い込んでいるよう。
髪は銀糸のように長く、肌は死人めいた白さ。にも関わらず、その双眸だけは、
紅玉のごとくギョロリと赤く、こちらを射抜いて離さなかった。

圧倒的な、存在感。

見下ろされているだけで、息が詰まる。小さな命が、ひとつの視線だけで、
グシャリと握り潰されそうな威圧感。

「僕の召喚に応じたか」

彼は……確かにそう口にした。

その言葉は耳で聞くというより、胸の奥へ直接と叩き込まれるように響いた。

「わ、たし……？」

震える声が、自分でも情けないほど細い。彼は、ゆっくりと歩み寄ってきた。足音が一切しない。スウツと滑るよう。だが一步ごとに空気がビリビリと震え、祭壇の青白い炎さえピクリと小さく揺れる。間近に迫った瞬間、私は確信した。

この人は、人間じゃない。

その気配は、血と夜にまみれた、恐ろしくも妖艶な支配者のそれだった。
その美貌の唇がわずかに吊り上がると、白い牙がチラッと覗いた。

「弱き光の世界の君よ。僕の地へ呼ばれし贄」

その声音には、抗うことなんてできない。意味も全くわからない。

「……………」

彼は満足げに目をスッと細めると、白い指先でわたしの顎を持ち上げた。
冷たいのに、なぜか熱に浮かされたように感じる触れ方。

「よろしい。君は、今宵より僕のものだ」

その一言で。

わたしの平凡な日常は、完全に終わったのだと悟った。

第一章 この世のものではない

紅玉の瞳が、真っ直ぐにわたしを射抜いていた。逃げようとするその足は、全く動かない。見えない鎖で繋がれているみたいに、身体が動かせなかった。彼の視線が、そのまま私を支配する檻なのかと錯覚する。

「……怯えているのかい？」

彼の声が、わずかに低く笑う。その笑いが、耳の奥でゾクリと甘く響いた。

「……」

「恐怖は甘美だ。ゆえに、いい香りがする」

「か、香り……？」

意味がわからない。けれど、彼の瞳が細まる瞬間、肌をなぞる感覚が走った。まるで、嗅がれ、品定めされているような屈辱と、得体の知れない快感が走る。スウツ。風が揺れたような音。気配が一瞬で、わたしの目の前まで移動する。

「ま、待って……！」

喉が乾き声がかすれている。私の体が勝手に後ろにのけぞろうとするのに、見えない力がそれを許さない。理解が追い付く前に、強制的に理解させられた。

「恐れることはない。……いや、そうだな……恐れていいよ。いい匂いだ」

低い囁きが、耳のすぐ傍を掠める。彼の姿は、もう目の前。

距離、ゼロ。

吐息が触れ合う。胸が、彼の声に合わせて打たされているように暴れている。

「君の瞳は、よく震えるね」

彼は、愉しげに言った。冷たい指先が、頬の近くを触れたか触れないかの、最も焦らされる距離でスウ……となぞられる。

……触れてない。はずなのに。

なぞられた軌跡だけ、焼けるように熱い。息を吸うたびに、空気が重くなる。目の前の彼は、ただ立っているだけ。でも世界が全部、彼に引き寄せられていくみたいに見えた。

「名を、名乗るんだ」

「え……？」

「この地では、名が契りだ。名を知らぬ者は、存在すら許されぬ」

「……あ、あかね。北川あかね、です」

「……あかね。良い名前だね」

名前を呼ぶたび、空気が震えた。その音が、皮膚の裏にすりと染み込む。呼ばれただけで、ゾクゾクと背中をなぞるように快感が広がる。

何か変だ……なにこれ？ エッチな要素なんて、何もないのに……。

「僕の名は、リシュフォン」

「リシュフォン……」

「呼んでくれたな。これで僕らは通じ合える」

「は、はい……」

彼はゆっくりと顔を近づけ、唇が耳に触れそうな距離で止まった。

「今宵より、君は僕のもの」

低い囁きが、まるで呪いのように、でもどこか甘く、私の魂にまで響いた。心臓がひときわ大きく跳ね、膝がガクンと震え、顎をそつと持ち上げられた。その指先は冷たいのに、火照るほど熱い。彼の瞳の奥に、紅い光が灯る。

「……怖いのかい？」

「……こ、わい……です……」

「そうか。ならば」

唇が、触れそうな距離で止まり息が混ざる。その瞬間、世界が静まり返った。

「僕の味を、少しだけ知ればいい。フウ」

その囁きとともに、首筋へ冷たい息が吹きかけられる。

ゾクリ！

弾かれたように全身が震えた。触れていないのに、肌の奥に快感が浸透した。痛みでもなく快でもない、けれど確かに支配される甘さが、そこにあった。

なに……これ。なんで、感じてるの？ 私。

「ついて来て」

彼が立ち上がり、私は黙って後ろをついて行く。全く抗う事はできない。

なんで？　こんなの怖いはずなのに、なんで私は従うの？

深紅の絨毯が敷かれた長い廊下。私の足音だけが空気に溶けるように響く。背後には、あの紅い瞳を持つ人。彼の存在は、視界の端にあるだけで重たく、体の奥まで押し付けられる重圧を感じさせた。

あれ？　さつき前にいたよね？　それに彼の……足音がしない。なんで？

訳が分からない事ばかりだった。外からいきなり中にいたり、消えたと思っ

たら現れたり。まるで、夢の中にでもいるみたいに不思議な感覚に襲われる。

「怖い……」

体がぞくつ、と震える。なぜか胸の奥だけが熱を帯びるのを感じとりながら、無意識に視線を落とす。廊下を曲がるたび、背筋に冷たい空気がまとわりつく。耳元で囁かれるような、指先で撫でられるかのような錯覚。彼は触れていない。けれど、皮膚がそれを快感として敏感に感じ取っている。

「……怯えなくていい。もう怖い事はない」

いや……あなたが怖いのだよ。

その声に、体が反応する。歩く膝が小さく震えて、呼吸だけが荒くなってる。心の奥で、小さな火がじわじわと、理性を焼き焦がすように膨らんでいつてる。

ガチャ。

重厚な扉が勝手に開かれ、その先を見れば、薄暗い灯りが揺れる部屋だった。壁にかかるタペストリーの異形の紋様が、私の視線を吸い込んだ。

何もかもが……いびつ……。

「座るんだ」

ソファを指差すその指。恐る恐る腰を下ろすと、彼は背後に立ち肩に触れた。息づかいと空気の揺れ、視線の圧……全てが、私という存在を支配し尽くす。

「……… いったい、これはなに………」

小さく漏れる私の声に、彼はゆっくりと頭を傾けて、私の耳元に唇を寄せる。

「感じたのだ……… 君の心臓の音が、僕を呼ぶ声を」

背筋をぞくぞくと電流が走り、膝の震えが止まらない。

どくん、どくん。

鼓動が跳ね、体の奥がじわじわ熱くなる。服の上から肩に指が触れてるのに、地肌に触れるかのように、甘い痛みが広がり、体の奥が勝手に反応する。

じゆく。

「……あっ……！」

思わず小さな声が出る。声にならない声でも、背後の彼には届いているのか、ゆっくりと微かな圧が増す。肩から腕、体全体が淫らなほど敏感になる。

「牝の芳香がたちこめて来たぞ」

「いや……」

「……君は……僕を、望んでいたよね？」

意味が分からなかった。初対面の彼を、なぜ私が求めていたのか？

なぜか低く囁かれるその声に、背筋が熱くなる。胸の奥の小さな炎は大きく、背徳的に揺れて息が荒くなる。心臓がシグナルのように打ち、皮膚の感覚と、耳元の息づかい、肩への指先の圧。全てが絡み合い、体を掌握される感覚。

「……ああ……」

「君の声は、いつも、しっかりと僕の耳に届いていたぞ」

「……な……んの、事……でしよう……」

「君は、誰かに必要とされたいのだろうか？」

「なぜ……それを……」

理性ではなく、身体の奥底から思わず呟いた。体は熱く、心は甘く揺れる。恐怖と快楽が絡み合い、甘いざわめきが全身を支配する。彼の影が私の後ろで、わずかに動く。空気が裂けるような音がした気がして、体がピクツと反応する。

「……怖い……」

小さく呟くと、耳元で低く、甘く響く声が返る。

「まだ怖いのか？ ……むしろ感じてるんじゃないか……？」

言葉の刃が、胸に突き刺さる。体は震え、手のひらの汗がじっとり伝わる。背後の影はじつとしていただけなのに、存在が強く、体を包む空気までが重い。視線の圧で思わず膝をすくめ、股間に手を入れてぎゅっと押さえこんだ。

「……どうして、こんなに……」

思わず漏れる声に、影は優しくフツと笑った。その声は耳に届くというより、体中の神経に直接触れるようだった。甘く、皮膚の奥まで浸透するような感触。

「……動くな、じつとしている」

低く響く命令に、体は勝手に従う。座ったまま、膝をぎゅっと押さえつけて、

視線だけで彼を追う。彼と目が合うたびに、胸の奥がぎゅっと締め付けられ、手足がじわじわと熱くなる。理性が、これはおかしいと警告しつばなしたが、体が確実に反応してる。いつのまにか目の前に立つ影が、ゆっくり顔を寄せた。

うう……ち、近づいて来た……。

「……君の心は、僕のものになる……」

綺麗な顔から発せられる甘く熱い声が、耳から脳、そして体全体に染み渡る。体が熱を帯び、ぶるぶると震えて来て、髪の毛の先が揺れる。

だめ……おかしい。私……欲情してる？

体の奥に甘い衝撃が走る。恐怖と焦らし、そして知らず知らず芽生える欲望。すべてが絡み合い、私の心を締め付けて離さない。

「……っ……く、くるしい……」

何かが変だ。私の意志ではないようだけど、なぜか彼に逆らえない私がいる。意識はまだハッキリしてるのに、体だけがなぜか淫らに正直に反応している。

「どうした？ 体が言う事を聞かないのか？」

彼は楽しむかのように、さらに間合いを詰める。胸が小さくぶるりと揺れ、

理性と欲望が絡み合う。私は知らず知らずのうち、次の瞬間を待ち望んでいた。

「……くっ……ど、どうして……私……へん」

声が震える。肩に冷たい空気がかすめるだけで、胸の奥がゾクゾクと疼く。膝がガクガクと震え、手のひらはじつとりと汗ばむ。彼は赤い唇を吊り上げ、赤い瞳でじつと見つめる。その視線が、体の奥の小さな火を揺らしてくる。

ああ……何か……体が求めてる……。

「それが、君が求めている反応だ。心の真の部分だ」

私の困惑を読み取るようにして、彼が告げた。

「……うそ、だって……私……」

「……動くな……じつとして……僕だけを見るんだ」

低く、甘く響く声。耳元で囁かれると、体の奥に熱い波がじわじわと広がる。体が反応し、理性では怖いと思うのに、体は正直に欲望を覚えてしまう。

「……そ、そんな……っ　なんで、ときめく……」

小さく漏れた声に、影は微かに首を傾げ、耳元で小さく低く囁く。

「……心臓の音が高鳴っているよ……」

胸の奥がギュツと締め付けられる。鼓動が耳にまで届き、体中が熱く疼く。

なんでそれを？

すると彼が、また私の心を見透かしたように言う。

「なんで？ 君がそれを求めているからさ」

私は息を整えようとするが、体は反応を止められない。視線を合わせるたび、胸の奥で何かが弾けるように熱を帯び、体中が敏感に反応する。

「……あ……っ、く……」

小さな声がもれ、腰のあたりが勝手に熱を帯びる。彼は微かに唇を吊り上げ、牙がちらりと見えるだけで、体の奥の火はさらに揺れる。

えっ……き、牙？？ 私は思わずつぶやいた。

「ヴぁ……ヴァンパイアさん？」

すると彼は突然、人懐っこい表情を浮かべる。

「くっくっく。アハハハハ」

「えっ？」

次の瞬間、影は一步近づき、指先でゆつくりと腕に触れる。

「正解……」

その言葉に体がビクッと跳ねる。膝の震えが止まらなくなる。

「……っ、いや……だめ……怖い」

理性で抗おうとするが、体は勝手に反応してしまう。鼓動は耳にまで届き、呼吸が荒くなる。胸の奥で小さな炎が揺れ、恐怖と甘美が混ざり合う。

「……心配するな……君の欲望を、全て曝け出せ……もう僕慢しなくていい」

視線と距離の焦らしに耐えきれず手を胸に当てるが、体は熱く心は焦がれる。
小さく震える声が、空間に吸い込まれるように消えていく。

「あ、あの……あの……」

「……君は、僕のものになる……」

低く響く声が頭に直接届き、理性の最後の壁を揺さぶる。

……私は……あなたのもの……。

心の小さな炎は、もう恐怖だけではなく、甘い欲望の火に変わり始めていた。彼の指先が、ゆっくりと私の胸元に近づく。肌に触れ、体がビクッと跳ねる。目の前の紅玉の瞳が吸い込むように私を見つめ、息が止まりそうになる。

おぼろげな意識の中で私は、これがヴァンパイアの魔力だと分っていた。

「……や、やだ……」

小さな声が震え、膝がガクガクする。彼の指は、躊躇なく乳首へと滑る。

スッ……。

先端に触れると、体中に電流が走ったようにビクンと震える。

「んっ……あ……ああっ……」

息が荒くなり、胸の奥がぎゅつと締め付けられる。乳首を軽くつままれたり、指先でくるくると撫でられるたび、体が熱く疼く。

「はあっ、あっ……だめ……そこは……」

理性では拒みたいのに、体は正直に反応してしまう。胸の奥から腰の奥まで、熱がじわじわと広がり、思わず私の全てを委ねたくなってしまう。

彼は唇を吊り上げ、低く甘い声で囁く。

「まだ、僕の魔力に抗うか。だが、だからこそ僕は君に惹かれている」

指先が乳首をすりとなぞり、ねじるように触れるだけでびくんと震える。

「んっ……あぁっ……」

乳首から腰の奥へと熱が広がり、股間を押さえつけても勝手に出て来る。

じゅく。

「もっと……僕に体を委ねろ……」

股間を押さえつけている腕をどけられて、彼の手が内腿へと滑り込む。

スツ……スツ……

スカートの上から太ももの内側を擦るたびに、体の奥が疼き息が荒くなる。

「あつ、あぁつ……そこは……っ」

まだ触れていないのに、内腿の微かな刺激だけで体が跳ね、崩れそうになる。彼の手に背中がゾクゾクとし、乳首と内腿への焦らしが、体中を熱で満たす。

「んっ……だめ……」

でも……気持ちいい……。

「そうか、気持ちいいか」

「ああ……」

心が読まれる！ 理性で抗おうとする自分と、正直に反応してしまう自分。
心の中で戦うほど、体は蕩け甘美に支配されていく。

さわっさわ……。

指先はまだじつくりと、布の上から内もみを軽くなぞり刺激する。

「だめ！」

その奥が……いい。

「そうか……奥が良いのか」

ああ……バレてるう……。

私の本当の気持ちは全て、彼に漏れている。彼の唇が耳元に近づき低く囁く。

「いいんだよ……体、すべて僕に預けるんだ……欲望に抗わなくていい……」

声を聞いた瞬間、奥の熱は爆発寸前に達する。震えも腰の反応も止まらず、

胸はビクビクと跳ね、乳首は指先に絡め取られるたびに疼く。意識は蕩けて、頭の中は快感だけに支配されていく。

「はあっ、んっ……だめえっ……でも……ああっ……」

太ももを撫でる指が、スカートの布を押しつけて指が奥へと入り込んでくる。

「だめえ」

「奥がいいと言ってたではないか」

「ああ……言っていない」

すりっ……。

パンティの上から、指先が股間に触れた瞬間、体がビクッと跳ねる。

「んっ……あっ、やっ……あぁっ……」

膝がガクガク震える。腰も自然に浮き、奥から熱がジワジワと押し寄せる。指はパンティの、クリトリスの上あたりを軽く這う。

スーッ……スーッ……。ゾクゾクう……。

微かな刺激だけで、体は勝手に反応してビクビク震える。

「だ、だめ……でも……あっ、あぁっ……」